

友人のトランペッター、  
 こだま和文君から新しいCD  
 アルバム「かすかなきぼ  
 う」が送られてきた。哀愁  
 と、静かな怒りのレゲエタ  
 プ。饒舌を排したシンパ  
 ルなメロディーは、もはや  
 僕に染み込んでいるが、こ  
 こにきて、人へというより  
 空へと鳴り響いているよう  
 に聴こえてくる。

ジャケットは彼が描いた  
 青い空に白い雲の絵。これ  
 がとても良かった。お礼の  
 メールを送ると、その返信  
 に空を見、よく撮ります」  
 と書かれ、1枚の曇り空の  
 写真が添付されていた。  
 僕も空を見る。そこには、  
 同世代を生きた2人に共通  
 した切実さがあると感じ  
 る。今の時代に対する憤懣。  
 暗然たる未来への予感。そ  
 んな鬱々とした気分が、反  
 動として空に目を向けさせ

ているのではないか。  
 子供の頃は空を見なかつ  
 た気がする。見るまでもな  
 く、自然の内に受け止めて  
 いたのだ。学校を終えると  
 いつも外で遊んだ。瞬之間  
 に時は過ぎ夕刻が迫る。一  
 日を惜しむ、あのキュッと  
 締め付けられる感覚。その  
 ころの町には、家々の夕餉  
 の煙が空に染み入るよう

空

な、静閑とした薄暗さが漂  
 っていた。

外であまり遊ばなくなっ  
 た今の子供にも空はある。  
 暮らしの質の変化はあろう  
 とも、日毎無意識の内に浴  
 びている。いつの時代も、  
 子供は明日の空を疑っては  
 いない。だからわざわざ見  
 ることはないのだ。  
 大人はどうなのだろう。

恋をすると空を仰ぐ。それ  
 は人を投影するでかいスク  
 リーン。感情や思い、人が  
 密にある空だ。「虹と共に  
 消えた恋」なんて歌がある  
 くらい。だが、年とともに  
 日々の煩雑さに目を奪わ  
 れ、もっぱら物理的な気象  
 としての空になってしま



を思い起こす。空漠とした  
 孤独、死への実感から、果  
 てのない空を仰ぐようにな  
 るのではないか。  
 よく釣りをしていた僕  
 は、海の状況を知ろうと、  
 いつも雲の動きを確かめて  
 いた。以来、天気に関係な  
 く昼も夜も空を見上げるの  
 が癖になっている。

そして今、ますます空を見  
 る。仕事場の窓から広がる  
 空を1日に何十回見ること  
 だろう。空との浅い呼吸、  
 深い呼吸。

う。ギラつく夏空や、寒風  
 の冬空に恨めしい視線は向  
 けても、普段は置いてきぼ  
 り。在るのはわかっている  
 と頭の中にしまい込み、自  
 らの目をやらなくなる。  
 そうやって年を重ね、社  
 会の役目を終えるころにな  
 ってようやく忘れていた空

何もかを忘れ去り逃れ  
 ようとする空か。一生とい  
 う枠から外れた無限でも追  
 おうとする空か。いや、も  
 う想像なんてしないし、情  
 緒や言葉で語れないものな  
 ってきた。自分の空でも  
 ない、意味の空でもない、  
 空の空。

(吉田 淳治・画家)